

原 著

英語並びに看護系科目の海外短期研修プログラムと
単位認定に関する一考察
—Curtin University 健康科学部の視察を中心に—

中田りつ子¹⁾, 成沢和子²⁾, 楊箸隆哉¹⁾, 畔上真子¹⁾, 今野理恵³⁾

Study on oversea's short-term credit exchange of english and nursing subjects
—Analysis based on the study-tour of the faculty of health science,
Curtin University of Technology, Perth, Western Australia—

The purpose of this study was to find out the actual situation of oversea's short-term credit exchange of English and nursing subjects in Nursing Universities including Junior Colleges.

Two methods were used: first of all, the authors have investigated the literatures on this subject for 3 years after the introduction of amendment of new nursing curriculum, using 3 key-words such as International Cooperation, Study-Tour, Credit-exchange. Secondary, they have made the study-tour for the Faculty of Health Science, Curtin University of Technology, Perth, Western Australia.

Analysing the materials taken from above two methods, the authors got the results:

1. Both the sender and receiver of the students should work on together the purpose, curriculum contents and the methods of evaluation from the view point of both short and long spun. After practicing, they should evaluate the curriculum together with the students.
2. Before attending the course class, the students are required to review the history of two countries for better understanding.
3. The positive support of daily life for students is essential, and the teaching staff of the both universities should try to built the good relationship.

Key Words:

International cooperation (国際協力), Study-tour (海外研修), Credit-exchange (単位互換)

- 1) 信州大学医療技術短期大学部看護学科; NAKATA Ritsuko, YANAGAHASHI Ryuya, AZEGAMI Masako, Dept. of Nursing, School of Allied Medical Sciences, Shinshu Univ.
- 2) 信州大学医療技術短期大学部一般教育等; NARUSAWA Kazuko, Dept. of Liberal Arts, School of Allied Medical Sciences, Shinshu Univ.
- 3) シドニー大学看護学研究科; KONNO Rie, Student of the Master Course, the Faculty of Nursing, Sydney Univ.

はじめに

平成8年8月、保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則（以下指定規則とする）が文部省・厚生省の共同省令として官報告示¹⁾され、平成9年度よりこの新しい指定規則による改正カリキュラムの実施をみている。改正の骨子は①少子・高齢社会への対応、②カリキュラムの弾力化、③高学歴指向への対応を具体化したことである。

改正点として、時間制から単位制への転換、教育科目の規定から教育内容の規定、在宅看護への対応、精神看護学の導入などがある。

また、国際協力を科目の内容として打ち出しているところにグローバル化という時代性への対応がうかがえる。具体的には、基礎科目領域で「国際化及び情報化へ対応しうる能力の育成が可能な内容を含むことが望ましい」、専門科目領域では「国際社会において、広い視野に基づき、看護婦（士）として諸外国との協力を考える機会をつくる」と明記された点である。

信州大学医療技術短期大学部（以下本学とする）は、平成10年4月、国際理解の精神にのっとり、豪州西オーストラリア州パースのカーティン工科大学と交流・協力関係を増進し、両大学の利益に資する共同教育プログラム並びに共同研究プロジェクトの推進を目的に学術交流協定を締結した。

平成12年夏、4年制化を視野におき、国際協力科目の具体化のためにカーティン工科大学を視察し、国際課並びに看護科担当者との直截な交流からの学びと、既に国際協力科目を展開している看護系大学の研究報告等の分析から、本学における国際協力科目展開の方向と方法に関する多くの示唆が得られたので

ここに報告する。

研究目的

医療系短期大学を含む看護系大学での、国際協力科目の海外研修並びに単位互換に関する実施状況を把握し、本学との学術交流協定締結校において当該科目の展開の方向と方法を分析する。

研究方法

(1) 改正カリキュラム以降の約3年間における文献を、国際協力・海外研修・単位互換をキーワードに医学中央雑誌で検索し、国際協力科目展開の方向と方法の視点から文献研究を行う。

(2) 本学との学術交流協定締結校であるカーティン工科大学健康科学部を以下の目的と討議項目をもって訪問し、国際協力科目展開の方向と方法の可能性を分析する。

・訪問の目的は、カーティン工科大学の海外学生向けに展開し、あるいは展開可能な看護に関連した科目にかんする単位互換の可能性について探ることである。

・単位互換プログラムを行う目的は、

①学生達は、英語を使って、異文化・多文化という環境で生活する方法を経験できる。

②他の国々の人々との交流を介して、国際的感覚を持つということの意味を理解し、アジア、オセアニア諸国の人々との協力関係構築の助けとなる。

③看護学教育の早期に、異文化体験をすることは国際化指向の動機づけとなる。

・討議事項

- ①コースのコーディネイター
- ②期間と時期
- ③宿泊施設
- ④費用

⑤その他

カーティン工科大学の概要

カーティン工科大学は、Australian Vice-Chancellors' Committee 並びに英連邦大学協会の会員校として1967年連邦政府によって設立され、オーストラリア政府の Quality Assurance Committee によって研究、大学運営そして地域へのサービスに関してトップグループの大学としてランク付けされている。

学生総数は、25,000人でその内の6,000人は世界75カ国からの留学生である。

Bussiness, Engineering, Health Sciences, Humanities, Agriculture, Mining の学部からなり、365のコースを提供している。

健康科学部：Health Sciences は、Biomedical Science, Nursing, Occupational Theapy, Physiotherapy, Psychology, Public Health, Speech and Hearing Science の各科と、薬物乱用予防の研究センター、International Health センター、行動科学研究所から構成される。理学療法、作業療法学科は Shenton Park キャンパスで、他の学科はパース市の中心街から10 km のベントレーキャンパスで教授されている。

パース市の概要

西オーストラリア州の州都パース市は、人口約100万人、インド洋にそそぐスワンリバーの河口近くに開けた緑豊かな国際都市で、成田空港から直行便で約7時間の距離にある。1616年オランダ人によって発見され、その後イギリスの植民地となり、19世紀後半にはゴールドラッシュに沸いたこの土地は、現在でも多くの地下資源を産出し、オーストラリア経済の一貫をになっている。

結果

1. 文献研究から

看護&単位互換と看護&海外研修の検索での文献はゼロで、看護&国際協力の文献総数は38件であった。国際協力科目展開の方向と方法の視点からの主要な先行研究をみると、「国際協力に関わる看護人材育成に関する基礎調査」²⁾ (矢島和江2000年)、「聖マリア学院短期大学専攻科地域看護学専攻—国際看護コースの現状と分析—」³⁾ (根本恵子1996年)がある。

矢島は国際協力活動体験者の80%が専門学校卒業者であることから、関東7都県の看護専門学校80校を対象に国際化対応科目の導入状況についてアンケート調査を実施し、有効回答数49校についての分析・報告をしている。「授業科目ありは12校、そのうちの3校は単位科目として設定し、他の9校は基礎看護学概論の範囲内で実施している」⁴⁾。

しかし、「授業形態は学外講師による講演、あるいは関連施設からの講師による授業、ボランティア活動、在日外国人との交流など多岐にわたり、平均授業時間は4時間」⁵⁾と報告している。また、アメリカ合衆国、イギリス、オーストラリア、スイス等で海外研修を行っていることを報告しているが、具体的な内容についての記述はない。

根本は、自身の所属する教育機関に1990年に開設された、開発途上国における広範囲な保健医療活動を行う人材の養成を目的とする国際協力コース(短期大学専攻科地域看護学専攻：定員40名における1年間のコース)についての開設6年目の現状を分析・報告している。開発途上国での体験を通じて国際協力の重要性を深く認識し、看護職として国際協力に参加する際に求められる自己の能力を向

Table 1. Curtin University of Technology
School of Languages and Intercultural Education

English Language Study Tour

Week One

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9 : 00—10 : 30		Orientation	English class	Reading-	Writing-
10 : 30—11 : 00			Coffee break	Coffee break	Coffee break
11 : 00—12 : 00			English class	Reading-	Writing-
12 : 00—13 : 00			Lunch break	Lunch break	Lunch break
13 : 00—15 : 00			Conversation class	Behind the news	Excursion to Fremantle

Week Two

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9 : 00—10 : 30	Writing-	Reading-	Writing-	Reading-	All day excursion to Rottneest Island
10 : 30—11 : 00	Coffee break	Coffee break	Coffee break	Coffee break	
11 : 00—12 : 00	Writing-	Reading-	Writing-	Reading-	
12 : 00—13 : 00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break	
13 : 00—15 : 00	Excursion to art gallery	Guest speaker	Conversation class	Behind the news	

Week Three

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9 : 00—10 : 30	Writing-	Reading-	Writing-	Reading-	All day excursion to Pinnacles
10 : 30—11 : 00	Coffee break	Coffee break	Coffee break	Coffee break	
11 : 00—12 : 00	Writing-	Reading-	Writing-	Reading-	
12 : 00—13 : 00	Lunch break	Lunch break	Lunch break	Lunch break	
13 : 00—15 : 00	Vocabulary class	Guest speaker	Conversation class	Give presentation	

Week Four

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9 : 00—10 : 30	Writing-	Reading-			
10 : 30—11 : 00	Coffee break	Coffee break			
11 : 00—12 : 00	Writing-	Reading-			
12 : 00—13 : 00	Lunch break	Lunch break			
13 : 00—15 : 00	Listening	Graduation			

The above course outline is an example only and can be customised according to participants' needs and requirements.

上することを目的とする韓国における10日間の海外実習は、国際コースの重要な科目として位置づけられ、特に、「韓国江南聖母病院での3日間の臨床実習を最も重視している」⁶⁾。学生は、30時間の初歩的な韓国語の学習後、臨床実習に臨んでいる。

他の先行研究の多くは、国際協力事業団での国際看護協力の活動を出発点とした実証的研究であるが、森は、自身の国際看護活動を原点に、今後、医療協力のために海外にでかける看護職に対し、あるいは再び医療協力にできる経験者へ、相手国の真の需要に応えられるような国際協力を行うための学問的基盤について検討資料を提供するという視点から「国際看護学の概念と看護の国際協力に関する日本の現状」⁷⁾ (森淑江, 1997年)を著している。

「看護職にとって、国際医療協力の基盤となる学問が国際看護学である。国際看護とは、International Nursing の訳語であり、異文化看護 Transcultural Nursing と同一の概念ではない。リディア・デサンティスが提唱する“国際看護はマクロのレベルで、異文化看護はミクロのレベルで”という言葉は、実に明快に両者の違いをいい表している。異文化看護とは、看護がかかわるあらゆる場面で文化の異同“違いだけでなく共通の部分にも”注意を払うことである。……国際看護の概念はもっと広く、自分のものとは異なる国(地域)で、その国の社会、政治、経済、教育、文化、保健医療システム、疾病構造など看護に影響を与えるあらゆるものを考慮して、看護の知識・技術を適用することである」⁸⁾とし、国際看護学の確立とカリキュラムとして含むべき内容について提言し、授業形態として、早期体験学習(スタディーツアへの参加)、国内外での実習の重要性を述べ

ている。

2. 視察から

《カーティン工科大学における英語の短期研修制度》

カーティン工科大学では、英語研修及び専門領域科目の学生のための短期研修制度が確立している。表1に英語研修4週間のプログラムを提示したが、①1週間を基礎単位とする、②学生は10人以上、という制約があるのみで、学生を送り出す側の要請するレベル、内容でプログラムを計画し実施している。

本学としては、医療的場面でのコミュニケーションツールとしての英語学習が望ましいと考えているので、カーティンの持つ健康科学部関連の医療施設を活用したプログラムが可能という点は大きな魅力である。シンガポール、インドネシア、フィリピン、タイ等多くのアジア諸国から学生を受け入れており、日本からも現在、関西大学の学生が研修中であるとのことであった。

《カーティン工科大学における看護科目の短期研修制度》

看護系科目に関しても、2つの制約は共通するが、まず、学生を送り出す側からプログラムに盛り込むべき内容を提示し、可能なかぎり要請された内容で研修が行えるような人材を探しプログラムを作成する。しかし、適切な人材が得られない等の困難が生じた場合、双方で協議・調整し対応するというシステムが確立している。

《単位認定の方法》

単位認定は、受け入れ期間中の①学生の学習態度、②到達度に関するレポートを、学生を送り出した側に報告し、送り出した側で単位として認定するという方式をとっている。

《滞在中の生活支援》

長期の交換留学生のためには大学が用意した宿舎があるが、短期研修の学生はホームステイが原則である。

英語研修プログラム担当者には日本人スタッフがおり、生活面での支援を行っている。ホームステイに入る前に、その担当者の家で、食事をはじめ生活の基本的なマナーを学習してホストファミリーへ送り出している。

《学生同士の交流の機会の設定》

今回の旅行メンバーには、7人の理学療法科の学生と1名の看護科の学生が加わっていたが、学生同士の交流の機会をもち多くの学びがあったと聞く。報告書を作成中とのことであるから、彼らの生の声、感想、要望を今後のプログラムに反映させたい。

考 察

《国際協力科目の導入校の科目内容と運営について》

専門学校と短大という設置主体の違いがあるにしても、矢島も指摘しているが、平均4時間、学外講師による講演、準備なし、内容を問うことなしの海外研修をもって国際協力科目を実施しているとしてよいのだろうかという疑問がある。

また、学内に適当な担当者がいない、関心はあるが、そのために学習する時間的余裕が教師にはないというのも事実と思うが、教師にもグローバル化時代の看護学教育の担い手としての努力が求められているということではないだろうか。時間が無いからと逃げてしまうことは、時間があってもできないことが筆者自身の体験からも多いように思われる。

大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」の中でも、多様な文化や価値観を受容し、その中で自らの考え方を主

張し、行動できる心豊かな人間を育てるためには、知識だけではなく、多様な文化に触れたり、多様な価値観の人々との交流を行うなど実体験をもつことが必要であるとのべられているが、これは日本にいても体験できることである。調査対象の専門学校は何校かも取り組んでいるが、ボランティア活動や在日外国人との交流を継続して行うことなどは本学でも参考にしたい。

《異文化看護》

本学の当面の目的は、異文化看護つまり、看護がかかわるあらゆる場面で文化の異同“違いだけでなく共通の部分にも”注意を払いつつ視野を広めるところにあるように思うが、森の指摘のように、国際看護学という大きな視野をもって活動する実践家を育てるという視点から科目の内容・方法を検討し、長期的な展望をもって対応していく必要があるだろう。

授業形態として、早期体験学習（スタディツアーへの参加）、国内外での実習が重要であるという点では、意見の一致をみているので、安全かつ効果的なプログラムの作成に努力したい。

《顔の見える交流を介してのプログラム作成》

“百分は一見に如かず”とはよくいわれるが、キャンパスの広さや施設の概要、交通の便、同じパース市内であっても中国系・韓国系多いところ、アフリカ系の多いところなど地域によって住み分けられていたり、変わりやすい気象条件、円対オーストラリアドルの為替レートが直結する生活、食文化の多様性など大学だけでなく生活の場として見聞して深まる多くの学びと示唆が得られたことから、遠隔地での交流であればあるほど顔の見える交流が大切であると改めて実感したとこ

ろである。教師間の交流が成功への大きな鍵と思われるので、交流をみつとっていきたい。

《看護科目の研修》

看護科目の研修は、ことばのハンディに加えて、最低10人という制約を克服するために学年を超えてのクラス編成ということが生じる可能性もある。学生を送り出す側としては、本学の教育目的、目標、卒業生特性といった基本的理念と学習のレディネスとの関連の中で、プログラムを作成する必要がある。また、場合によっては、個別な到達度と評価の段階をつくる必要性の生じる可能性もあるだろう。評価に関しては、双方対等な立場でなかつ、学生を加えてのカリキュラム検討が重要である。

《生活支援体制》

生活支援の体制が整っていることは、筆者らの海外生活体験からも、きわめて大切なことに思われる。ホームステイについて以下の項目に関する資料の提示があった。

- ・ホームステイを理解する：典型的なオーストラリア人とは、
- ・自分を理解する：どうして幸せになれるのか？ 4週間はそのホームステイでトライしてみる。
- ・主導権をもつ：何でも話して積極的に問題を解決する。
- ・カルチャーショックとホームシック
- ・ホームステイで家族の一員となるとは？ について具体的な事例を用いての説明があり、学生が滞在中に体験する可能性の高い状況でのよき道標となると思われる。また、カウンセラーやホームステイ担当者の個別な対応策が講じられているところも安心な点である。

オーストラリア総人口1,700万人のうち、

650万人は海外で生まれたか、もしくは両親が海外で生まれている。オーストラリアへの年間移民者数の33%がアジアからの移民、イギリス・アイルランド系移民はわずか1.8%という事実から、オーストラリアという国、典型的なオーストラリア人に対するイメージも変わらざるをえないだろう。

滞在中の体験から、例えば、「学生は乗り物内では立ちなさい、あるいは、全額の運賃を払いなさい」という公共交通機関内の提示に日本の学生は対応できるだろうか？ また、ドアを先に通り抜けた人は、続いてくる人がいないかうしろを必ず確認し、ドアを押さえていることはもちろん、開けて待ってもらった場合は、ありがとうと礼を言う。このような当然と思われる行為ができる学生が果たしてどのくらいいるであろうか？ と日本における彼らの行動を思うと心配になる。

加えて、最近は変わりつつあるが、平和ぼけとすら言われる日本の生活に安住し、安全の確認や危機場面に対応できる用意も必要であろう。このような視点から、生活面での支援体制は不可欠なことに思える。

《訪問国に対する歴史的認識》

渡航前に学習しておくべき内容のひとつに、その国と日本との歴史的関係があると思う。我々の短いオーストラリア滞在中の忘れられないひとつの体験として、オーストラリアが第二次大戦の相手国であったという事実である。戦争博物館や、戦争の記念碑には、日本兵によって命を落とした人々の名が刻まれ、ガイドの口から何度となくくり返される第二次世界大戦ということばを聞きながら、近・現代史をほとんど学んでいない学生を送り出すことの難しさを痛感した。関係性を築く上で、歴史的な事実を共有することは大切

なことだと思う。

また、シドニーオリンピックで、オーストラリアにアボリジニーという原住民がいた国であったことを知り、あるいは思い出した人も多かったと思われるがロイヤル・プリンスアルフレッド・ホスピタル訪問時、アボリジニーの老人と廊下で出会った。案内の理学療法士の説明によると、彼らは人口の約2%しか占めないにもかかわらず、入院患者の半数を占めるという。アルコール依存症、糖尿病、遺伝的な聴力障害など多くの健康上の問題を抱え、また、居住地の交通の便の悪さから教育の機会にも恵まれないという話から、カナダの原住民であるインディオと重なった。表面の華やかな部分だけでなく、その国を多面的に学ぶ姿勢を大切にしたいと思う。

結 論

- ①海外研修は、研修の内容、到達度、評価の方法など、相手国任せではなく、送り出す側の明確な長・短期的教育ビジョンのもとに行い、また、実施後は、両当事者並びに参加学生によるカリキュラム評価が不可欠である。
- ②効果的な研修のためには、受入国の歴史並びに日本との歴史的関係の事前学習が必要である。
- ③生活支援体制の確立と相手国との有効な協力体制を築けるよう担当教官の教育も視野におく必要がある。

引用文献

- 1) 看護教育編集室編 看護教育新カリキュラム展開ガイドブック13 保健婦助産婦看護婦学校養成除指定規則の改正。医学

書院 東京、1996年。

- 2) 矢島和江：国際協力に関わる看護人材育成に関する基礎調査—看護専門学校に於ける国際化対応カリキュラムの導入状況。群馬パース看護短期大学紀要，2(1)：19-24，群馬，2000。
- 3) 根本恵子：聖マリア学院短期大学専攻科地域看護学専攻 国際看護コースの現状と課題。聖マリア学院紀要，11：91-98，福岡，1996。
- 4) 前掲書2) p.21
- 5) 前掲書2) p.22
- 6) 前掲書3) p.93
- 7) 森淑江：国際看護学の概念と看護の国際協力に関する日本の現状。看護教育，38(12)：1027-1031，東京，1997。
- 8) 前掲書7) p.1027

参考文献

- 9) 大学・短期大学における看護教育の改善に関する調査研究協力会議：大学・短期大学に適用される保健婦助産婦看護婦学校養成所指定規則の在り方について（まとめ）。看護教育，37(1)：36-43，東京，1996。
- 10) 柳沢理子：看護の国際協力のイメージと実際。看護教育，38(12)：1014-1018，東京，1997。
- 11) 根本恵子：「国際看護」の教育の実際。看護教育，38(12)：1023-1031，東京，1997。

受付日：2000年10月16日

受理日：2000年11月30日